

広瀬宰平の漢詩を読む

令和元年11月17日（日）10:00～11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

はじめに

「宰平遺績」を平成28年に解説したが、それは満正氏が述べるとおり宰平氏の一生の事蹟の本文の部分であって、付録の「鍊石餘響」の漢詩について読めないで見送っていた。宰平の心境を察するには、漢詩をとりあえず読み下してみる。何編かには、恥を恐れずいささか拙い訳をつけてみたが、各自で詩情豊かな訳をつけていただくことを切に願う。

鍊石餘響

序

余は聞く、海南の地は高山峻嶽多しと。其の予土二州の間に盤踞するは、曰く別子山なり。遠く之を望めば、雲の縹緲^{みね ひょうびょう}として、疑うらくは神僊^{せん}の所、窟宅かと。而して中は宝氣多きかな。元禄の間、坂の豪富の住友なにがしかは、其の中に於いて鉦穴を開き、子孫紹業す。茲に於いて二百年。今茲の辛未の冬、其の宰、広瀬保水はその主命を奉じて東京に来る。一日酒を載せる。余を十髯^{じゆん}叟堂に訪ね、相共に酣飲す。經濟文章の得失を論ずること縦いままに因りて袖中の一卷を出して、余に囑^{たの}んで曰く、僕が簿領した余暇、頗る吟詠^{すこぶ}好^{この}し。積年の所得は衰然るに帙^{しゆ}となり、頃^{しほ}く友人の慇懃^{しんしん}に因りて、近体の若干首を抄出せり。將に以て梨棗を災いす。評訂を願ひ得て、併せて其の首に序す。余は乃^{すなわ}ち「浮一大白」、受けて之を読む。其の中は鉦山の作に係るもの多く載せ、筆は鎖々として声と成る。豈、金精の助けを得たるか。吟諷の際、保水は又、余の為に語って曰く。別子山の出銅は、年に百斤の数下らず。近くは洋人の分析術に学び、銅中の純金を鎔出して、而して毫^{わづか}にも損なき故の銅也。我が主は、広く其の事を官于奉じ、以て国家の用度と供する。是に於いて余は拍案して曰く、是有^{なんじ}る哉。子^{なんじ}は此の巻を評すを以て可^よし。夫れ世人の作詩は、類^おむね貧多務得、連篇累牘、疵瑕百出で、読者は即睡を思う。今子^{なんじ}の千百首中に於いて、一卷を抄出して、句鍛字鍊すれば、猶お銅中の純金を鎔出する也。且つ鉦山の事、世に之を知る者鮮^{すく}なし。將に読者を使て子^{なんじ}の詩に因りて、国家が宝の出る所に至るを知り、更に望み有り、雲縹緲^{らんひょうびょう}の想を。然るに則ち、此の集は薈^{しか}、山川を紀叙し、風月を吟詠するのみならず、抑そも亦經濟の一端を紀叙、吟詠する。而して將にその主の住友氏の意に負うこと無し。是、豈に、梨棗を災いすると謂うべきであらうか、否な謂うべきではない。乃^{すなわ}ち再び酒を呼び筆に命じて、書は巻を弁^あむを以て言を端^{もちだ}す。

辛未十二月、東京浅草仁愛橋南十髯叟堂にて撰ぶ

松塘客漁鱸元邦併書

辛未	明治4年
盤踞	根を張ってわだかまること。頑張って動かないこと。盤は大岩、踞は座る。
縹緲	高く遠いさま。遠く霞むさま。
裒然	蔵書が多い。
帙	書物を保護するために包む物。書物。
慫慂	すすめ
梨棗災	禍棗災梨、価値のない無駄な書籍を出版することを批判する。
貧多務得	くどい。
連篇累牘	文章が長すぎる。
疵瑕百出	誤りが多い。
縹緲	高く遠い様。

私は海南の地に急峻な山嶽が多いのを聞いている。その土佐と伊予の間の高地の山域は、別子山と言う。遠くからこの山岳地を望むと雲の峰は遠くに霞んでいる。神妙なる穴倉を疑ってかかると、宝の山であった。その昔、元禄時代に大阪の大富豪の住友が開坑する。そしてその子孫が鉱山業を200年間にわたり受け継いできた。明治4年(1871)の冬に、別子銅山の責任者の広瀬幸平・保水が使命を携えて東京に来る。私のいる十髯叟堂に訪ねて一日酒を酌み交わす。国家経済の事や詩作のことなどを話していると、懷中から一巻を取り出して頼んで言うには「私は余暇を惜しんで吟詠を楽しんだ。長年にわたり貯めた金は多くの蔵書となり、しばらく友人の誘いによって、モダンナ詩を少し作り出した。」と。添削推敲する。頼まれた批評と訂正を済ませ、序を贈った。私は白紙の状態で読むと、鉱山に関係する作品が多く書かれていた。筆は鎖のように連綿となり詩になっている。まるで銅鉱床の精に助けられているかのようである。詩を吟ずる際に保水は私に語る「別子銅山の産銅は年間に百斤は下回らない。近年は西洋人の科学技術に学んで銅の中の金を取り出して、損をしないようにした銅である。私の御主人は広くその事を公にして、国家に貢献した。」と。このことを聞いて、私は拍手喝采して保水の詩を素晴らしいと認めた。世の中の詩というものは、くどくて、やたら長くて、誤りが多いので読み手は眠たくなってしまふ。保水の千百の詩は、一巻だけを取り出しただけで、字句を鍛錬すれば銅の中の純金を取り出すように、いい詩になることは疑いない。別子鉱山の事を世間で知っている人は少ない。保水の詩を読んで国の宝が産出する所を知り、更には遠く雲がかすむ高山を眺望させよ。保水の詩集はただ山川を書きたて、花鳥風月を詠んでいるものではない。国家経済の一端を書き記し、読み詠っている。当主の住友家に負けなくらい保水自らの意志によるものである。添削推敲すべきものというべきであらうか、否そのままでいい。再び酒を酌み交わし、筆で君のために記す「書以弁巻端云」と。

明治4年(1871)12月東京浅草仁愛橋南の十髯叟堂にて選ぶ
松塘客漁鱸元邦が併せて書く

別子銅山

盤踞千年土豫間
銅精露出赤孱顔
莫將奇景論名嶽
到底囊中有用山

盤踞千年土予の間
銅精露出し、孱^{よわ}顔赤し
將に奇景をもって名岳を論ずるなかれ
底到、囊^{かん}中は有用の山

別子銅山

太古から土佐と伊予にまたがってそびえる四国の山に
銅鉾床が赤いあばた顔をして地表に露わに出ている
きれいな景色だから名峰だとかとつまらないことを言わない
ついには地中に銅を胚胎するいい山であった。

己未元旦

梅氣襲人濃若蒸
東天先拝海暎昇
身如宿疾痊離枕
心似宵眠醒遇燈
谷鳥嚶々轉喬木
溪魚澆々破寒水
迎新送舊尋常事
且喜吟情与歳増

己未：大正8年

梅氣人を襲い濃にして蒸すがごとし
東天先ず拝せば、海暎^{とん}昇る
身は宿疾痊へて枕を離れるが如く
心は宵眠醒めて燈に遇うに似ている
谷鳥は嚶々として喬木に轉り
溪魚は澆々として寒水を破る
新を迎えて旧を送るは尋常の事
且^{しば}らく吟情を喜び、歳と与^{とも}に増す

大正8年正月

梅の濃い香りが匂ってきてここちよい
まずは東の空に手を合わすと海上に太陽が昇ってくる
体は病が全快して床から起き上がった時のように晴れやかで
心は目覚めて灯に遇ったように明るい
谷の小鳥たちは高い木に止まって仲良く鳴きさえずる
谷の魚は澆刺として冷たい水の中で泳ぎ回っている
新年を迎えて旧年を送るのは普通のことであるが
しばらく心新たな思いを喜び、それは歳ともに増す。

漁蓑

蘋葉蘆花は舊知
倒邊和影共依々
曉凝霜氣銀鉞綴
夜拂露華珠屑飛
籬外常懸志和宅

蘋^{ひん}葉や蘆花は是旧から知られている
倒れる辺り影とともに依々たり
曉に霜氣が凝りて銀鉞綴る
夜には露華を払って、珠屑が飛ぶ
籬外では常に志和の宅に懸る

蘋：浮き草

竿頭時晒子陵磯
干晴干雨隨身穩
愛此蒙茸一領衣

竿頭は時に子陵の磯に晒す
晴に雨に身に随いて穩やかなり

此の^{もうじょう}蒙茸する一領衣を愛す

^{もうじょう}蒙茸：草が乱れる様

漁師の蓑

水草の葉や芦の花は昔から知られている

落とした影は寄り添っている

暁には霜が降りて銀の刺で覆われ

夜には露となり払うと水玉が散る

いい人の家の垣根の外では常に降り注ぎ

竿の頭は時には子陵の磯のように白くなる

晴れの日も雨の日も蓑は漁師の体を優しく包んでいる

この乱れた一そろいの衣を愛する

弟村途中

乳山高下路斜分
號々溪泉到处聞
野雉走蔵麩麦裏
一声鳴破満畦雲
路入荒村曲復斜
疎杉蜜竹接籬笆
濃香如蜜将衣染
満畝夕陽黄菜花

乳山を高下する路は斜めに分かれる

^{かくかく}號々溪泉を到る処に聞く

號々：碎け散る

野雉走り、蔵れる大麦の裏に

一声鳴き、破る満畦の雲を

路は荒村に入りて曲りて復斜に

疎杉蜜竹は籬笆に接す

籬笆：生垣

濃香蜜の如く将に衣を染めんとす

満畝夕陽黄菜の花

弟村途中

チチ山を上り下りする山路が坂となって分かれる

碎け散る谷川の水音を至る所に聞く

雉は大麦の中に隠れる

大麦畑を覆う雲を切り裂くように甲高く一声鳴く

山路は荒涼とした村に入ると曲がりくねって再び坂となる

まばらに生えている杉や竹の塊が生垣の脇にある

蜜のような濃い香りがただよって衣服に浸みこむ

菜の花畑を赤く染めて夕陽が沈んでいく

遊春

遊屐逢晴不暫閑
又提一榼出柴関
鏜鏜聲響春風寺

^{げき}遊屐逢晴暫く閑ならず

屐：はきもの

又一榼^{だる}を提げて柴関を出る

榼：酒樽

^{どら}鏜鏜の声が響く春風の寺

躑躅花蒸夕照山
幽塢鳥啼芳靄外
碧溪魚躍暖波間
酒天肉地好時節
莫道紅塵能汚顏

躑躅の花蒸す、夕照の山
幽い塢で鳥が啼く芳わしき靄の外
碧溪の魚、躍る暖波の間
酒天肉地の好時節

塢：ちいさな砦

靄：もや

道う莫れ紅塵の能く顔を汚すを

春に遊ぶ

履物をひっかけて青空の下に出かけると長閑とできない
また、酒樽を下げて折戸を出てみよう
刈る風の中に寺では銅鑼が鳴っている
ツツジが夕陽に手って赤味の山を更に赤く染める
香り漂うもやの外の暗い小さな砦で鳥が鳴く
碧りの谷間の魚は白波だつぬるまうった水面に跳ねる
酒がおいしく食べ物おいしい季節になった
埃が顔に架かる季節になったなどと言うなよ

緑陰

擁村新樹若無家
唯見炊煙縷々斜
鵲語穿雲留落月
蝶魂迷雨傍餘花
繫船溪叟閑垂釣
設榻村姿静売茶
却笑三生狂杜牧
遅来枉自負繁華

村を擁す新樹、家無きがごとし
唯見る、炊煙縷々斜なり
鵲語雲を穿って、落月に留まり
蝶魂雨に迷ひて、余花に傍ずく
船を繫ぐ溪叟は、閑かに釣りを垂れ
榻を設ける村姿は、静かに茶を売る

却ってきまな杜牧の三生を笑ってしまう
遅く来りて自らを枉げて、繁華を負う

杜牧：晩唐の詩人

緑の陰

新芽がもえたつ木々に取り囲まれて、家が見えない
たた炊事をする煙が一筋たなびいている
ホトギスの声が雲間に響いて、下弦の月が西に傾いている
蝶は雨を避けて花の下に止まっている
船を繫いで溪老人は、閑に釣り糸を垂れている
腰掛けて村人は黙って茶を売っている
つい気ままな杜牧の前生、現生、後生を笑ってしまう
遅れて来て自分の意をまげて、賑わいに背を向ける

宿山家

危巖欲落厭檐欹

危巖落ちんと欲して檐を厭うて欹ち

秋氣襲人成睡遅	秋氣人を襲い睡を成すこと遅し
窓影分明知獸過	窓影分明獸の過ぎるを知り
一輪山月度峰時	一輪山月峰を渡る時

重五為余生日酔後賦小詩

又逢重五酔醺々	又重五に逢うて酔 ^{くんくん} 醺々
蒲酒三杯先策勲	蒲酒三杯、先ず ^{いさおし} 勲 ^{しる} を策す
愧我当年徒墮地	我が当年を愧る、徒 ^{はじ} らに地に墮ちしを
英名難望孟嘗君	英名望み難し、孟 ^{しょう} 嘗君

同家兄有隣君賦

離情回首十年間	離情首を回す十年間	
北馬南船事往還	北馬南船往還を事とす	
帆影朝開赤石浦	帆影朝開く赤石の浦	
鞭聲暮度白川関	鞭声暮れ渡る白川の関	
陪随喜我添新夢	ますます随い我を喜ばすは新夢を添え	
憔悴憐君变旧顔	憔悴 ^{しょうすい} 君を憐れむは旧顔を変ず	憔悴：やつれる
早晚弟兄俱遂志	早晚弟兄俱に志を遂げ	
比隣隔屋佳家山	比隣隔屋、家山佳し	

冬日新居濱路上

腥氣忽衝鼻	腥氣忽ちに鼻に衝き	腥：生臭い
漁家沿水多	漁家水に沿いて多し	
林鴉銜祭肉	林鴉は祭肉を銜え	
村婦捨遺禾	村婦は遺り ^か 禾を捨てる	禾：穀類、あわ
雲暗叢祠樹	雲暗く叢祠の樹	
風揚曲岸波	風は曲岸に波を揚げる	
帰船如上陸	帰船は陸に上がるが如し	
帆影落寒坡	帆影は寒坡に落ちる	坡：堤

田家夜春

田家一夜響丁東	田家一夜、丁東響き
農事告成年正豊	農事成るを告げ、年正に豊かなり
聴得春声雜人語	春声を聞くを得て、人語 ^{まじ} 雑る
疎燈影閃雨窓中	疎燈の影閃 ^{ひら} めき、雨窓の中

大雪

吾廬如地底
埋没雪盈々
天曙有人過
簾頭聞屐声

吾廬は地底の如し
埋没して雪^{えいえい}盈々たり
天曙けて人の過ぐる有り
簾頭に屐の声を聞く

盈：満つる

屐：はきもの

牡丹

名園如画浄無塵
一段芳心最見真
夜月研々香世界
曉風淡々玉精神
多情自是足傾国
不語也能堪動人
杏弟桜兄零落尽
花壇君独占余春

名園画の如く浄くして塵無し
一段の芳心、最も臣を見る
夜月研々として香りの世界
曉風淡々として玉の精神
多情、自ずから是れ国を傾けるに足り
不語また能く人を動かすに堪える
杏弟桜兄零落尽くし
花壇、君ひとり余春を占める

庚申三月将省郷廿五日下午銅山是日雨雪

庚申：大正9年

多謝山靈送我帰
吹他春雪作霏々
霏々宛似離人涙
故濺衣襟濕不晞

多謝山靈、我が帰るを送り
他に春雪を吹いて霏^ひ々となる
霏々として、宛^{あたか}も離人の涙の^{ごと}似く
故^{ことさら}に衣襟に^{そそ}濺いで^{かわ}湿りて晞かず

霏：もや

此行家眷皆随臨発賦一律

征途且復共忘疲
喜見妻孥僕婢随
廿歳情懷省郷錦
一篇鍛鍊奉兄詩
江門舟為婦人急
駅路花因閏月遅
最是関心に京日
嵐山芳樹恐違時

途を征く、且つ復た共に疲れを忘れ
喜んで見る妻を^ひ孥き、僕婢随う
廿歳の情懷、郷を^{かえりみ}省る錦
一篇の鍛鍊、兄を奉る詩
江門の舟は婦人の急ぐを為し
駅路の花は閏月の遅きに^よ因る
最も是れ心を関ざして京に到る
嵐山の芳樹、恐れ^{たが}違ふ時む

義父季暁翁・・

深欣香火緑
父子暫同船
夜入金亀港

深く欣ぶ香火の緑
父子暫く船を同じくする
夜に金亀港に入り

朝登玉象嶺	朝に玉象嶺に登る	
絳雲花来路	絳雲花は路に来り	絳：紅
緑雨樹参天	緑雨樹は天に参ず	
宝殿珠楼下	宝殿は珠楼の下	
離情一黯然	離情は一黯然なり	黯然：心がふさぐ　もの悲しい

日此夜泊

檣影参差立	檣影参差として立ち	檣：帆柱　　参差：ふぞろい
鐘声依約伝	鐘声依約として伝う	依約：かすかに
蒼茫鯨海月	蒼茫鯨海の月	蒼茫：果てしなく広い
慘澹鹵田烟	慘澹鹵田の煙	澹：あわい　うすい　鹵：やせた
夢倦天難曉	夢倦んで天曉け難し	
愁多夜似年	愁い多く夜年に似る	
残樽余瀝在	残樽に余瀝が在り	瀝：したたる　　余瀝：飲み残し
独酌且醺然	独り酌んで且く醺然たり	醺然：酒に酔う様

室津竹枝

巖頭崛起室津神	巖頭崛起室津の神	崛起：そばだつ
曾仮神名喚室津	曾て神名を仮て室津と喚起ぶ	
満架祠前老藤樹	満架の祠前の老藤樹	
一年両度綴花新	一年に両度花を綴って新たなり	
一樹東風舊翠揚	一樹に東風は舊翠に揚がり	
嬌姿招客舞斜陽	嬌姿客を招いて斜陽に舞う	
春潮帶得臙油水	春潮臙油の水を帶び得たり	
流到楼前亦漾香	流れて楼前に到り、亦香りを漾わす	

雨中高砂途中

蹢躅曳杖客行遲	蹢躅と杖を曳いて、客遅く行く	蹢躅：よろける様　びっこをひく
満路泥深移歩危	満路泥深く、歩みを移すに危うし	
渡口呼船人不見	渡口に船を呼んで船人見えず	
馭中倩馬僕相随	馭中で馬を倩いて、僕相い随う	
山神問石憩孤店	山神は石を問うて、孤店に憩う	
野寺看松尋旧碑	野寺に松を看て、旧碑を尋ねる	
一夜高砂肅寂雨	一夜の高砂、肅寂の雨	
鐘声況又感曾時	鐘声況んや又曾時に感ず	

憩舞妓浜旗亭

一酌凭孤店	一酌孤店に凭 ^よ りに	
風光佐酒多	風光酒を佐 ^{たす} くこと多し	
松姿如舞妓	松の姿は舞妓の如し	
先我舞姿々	我に先じて舞う姿姿	
潮声鳴撼坐	潮声鳴いて坐に撼 ^{うご} かす	
帆影並当窓	帆影並び窓に当たる	
一片淡山翠	一片の淡山翠にして	
飛来落酒缸	飛び来たりて、酒缸 ^{ごう} に落つ	缸：カメ

浪華客中書感

千里遠辞南海浜	千里遠く辞す南海の浜	
布帆重入浪華津	布帆重ねて入る浪華の津	
旧交多是黄泉客	旧交多くは是れ黄泉の客	
新雨誰其青眼人	新雨誰か其れ青眼の人	
昨盛今衰商子業	昨盛今衰、商子の業	
奔名走利陌頭塵	奔名走利、陌頭の塵	陌：みち
通都気習豪華甚	通都の気習、豪華甚だし	
遊飲何妨又浹旬	遊飲何ぞ妨げん、又浹 ^{しょうしゅん} 旬	浹：あまねし 浹旬：10日

呈今澤叔蔵

呈：さしあげる

相逢一咲便開顔	相逢えば一咲 ^{すなわ} 便ち顔を開く	
坐定共驚雙鬢班	坐 ^そ ろに定めば、共に驚く雙鬢の班	雙鬢の班：白髪
別後三年恍如夢	別後三年、恍として夢の如し	恍：おんりの、ぼんやり
秋風春雨話銅山	秋風春雨、銅山を ^{ものがたり} 話す	

澱水舟中

春水百餘里	春水百里余り	
舟船一路通	舟船一路通ず	
枕横蘋葉上	枕は横たう蘋葉の上	蘋 ^{ひん} ：浮草
帆走菜花中	帆は走る菜の花の中	
楊柳鶯衣雨	楊柳鶯衣の雨	楊柳：川柳と枝垂れ柳 鶯：うぐいす
兼葭鷺羽風	兼葭 ^{けんか} 鷺羽の風	兼：よし、あし 葭：あし、よし
飽看新活画	飽きて看る新活の画	
真箇臥游同	真箇臥游に同じ	真箇：ほんとうに
		臥游：居ながらにして旅行気分になる

伏水客楼

客夢水楼驚幾回 客夢水楼驚いて幾たびか回わりて
強求詩句半窓開 強く詩句を求めて半窓を開く
一痕難定波間月 一痕さだまり難く、波間の月
柔櫓咿啞去又来 柔櫓咿啞去りて又来る

柔櫓咿啞：櫓のきしむ音

雨中入江州

蘋香蘆影路彎環 蘋香る蘆の影、路は彎がり環る
十里湖村水霧間 十里湖村は水霧の間
行喜家郷程漸近 行きて喜ぶ、家郷の程は漸く近し
笠檐先認旧青山 笠の檐、先ず旧の青山を認む

蘋：浮草

回郷書懷

弛肩暫此脱征裘 肩を弛るめ、此に暫く征裘を脱し
依旧郷情不易忘 旧に依りて郷情を忘る易からず
集友一宵斟酒久 友を集め一宵の酒を斟むこと久し
留僧半日話詩長 僧を留めて半日詩を話 こと長し
落花啼鳥春帰夢 落花啼鳥の春は夢に帰り
芳草蝸牛雨満塘 芳草蝸牛の雨は塘に満つ
正是清和好時節 正に是れ、清和の好時節
田家未到插秧忙 田家は未だ到らず、秧を挿して忙し

征裘：かわごろも

僧：仲買人

塘：つつみ

呈家兄有隣君

伝家有旧業 伝家旧業有り
郷里喚為師 郷里喚師と為す
奕世名愈赫 奕世の名、愈 赫く
中年術盆寄 中年術盆寄す
真情在詩酒 真情詩酒に在り
余事及琴棋 余事琴棋に及ぶ
燈火対床夕 燈火対床の夕
空村霖雨時 空村霖雨の時

奕世：代々の、累代の

霖雨：しとしとと降る雨

登長命寺

雲擁千峰互吐吞 雲は千峰を擁し互いに吐き吞む
幾層台樹幾重垣 幾層の台樹、幾重の垣
登登人在青天外 登々の人、青天の外に在り

万頃琵琶湖小似盆 ^{ばんけい}万頃の琵琶湖、盆の^{ごと}似く小なり 小似盆：盆のごとく小か、否や大

湖亭即興

買酒湖亭興未闌 酒を買い湖亭興るは未だ闌ならず 闌：たけなわ
雲帆影過曲欄干 雲帆の影は曲がった欄干を過ぎる
擊来三尺琴高鯉 撃ち来る三尺琴高の鯉 琴高：鯉に乗って天に昇った仙人。鯉。
撥刺余威欲躍盤 撥刺余威、盤に躍らんと欲す 撥刺余威：魚が飛び跳ね勢いあまって

発郷

欲使別愁輕 別愁輕かしめんと欲す
強傾酒幾□ 強く傾ける酒、幾杯 □の字は舟光 幾杯：何杯も
兄弟無一語 兄弟一語なし
千万意中情 千万意中の情
天涯結惡縁 天涯に惡縁を結ぶ
棄去故郷天 棄て去る故郷の天
湖水亦西下 湖水また西に下り
送吾過淀川 我を送るりて淀川を過ぎる

船発浪華

曉得東風海氣豪 曉に東風を得て海氣豪し
千帆神速破奔涛 千帆神速、奔涛を破る
天王寺塔試回顧 天王寺の塔、試みに回顧すれば
纔自潮頭三寸高 ^{わずか}纔に潮頭より三寸の高さなり

登銅山

東西千里六旬間 東西千里、六旬の間 旬：10日、10年
雨馬風帆往又還 雨馬風帆往きて又た還る
二十年来温飽地 二十年来、温飽の地 温飽：飽食暖衣
主恩高处再登山 主恩高处、再び山に登る

手裁山木已成叢 手は山木を裁り、已に ^き叢 ^{すで}と成る
陰密不容斜日紅 陰密容れず、斜日は紅なり
最是晚来輕雨過 最も是れ、晚来輕雨が過ぎ
半簾涼翠影葱々 半簾涼翠、影は葱々たり 葱々：青い

晚酌是吾銷暑方 晚酌是れ、吾が銷暑の方 銷暑方：暑さ対策

小園例徒白雲牀	小園例徒、白雲の牀 ^{ゆか}	例徒：例えば
逃来薄領恹葱裏	逃げ来る薄領、恹葱の裏 ^{こうそう}	恹葱：せわしく忙しい
占断風辺月底涼	占断風辺、月底涼し	占断：占って判断する

暮色蒼然満戸庭	暮色蒼然として戸庭に満ち	
鳴泉繞枕響冷々	鳴泉枕を繞りて、響き冷々たり	
松枝栢葉層々影	松枝栢葉は層々の影	栢：かしわ。
落我涼牀夢亦青	我が涼牀に落ち、夢亦た青し	

風露先秋冷客衣	風露秋に先んじて、客衣冷たく
山姿林影暑威微	山姿林影、暑威は微なり
黄昏独坐誰相伴	黄昏に独り坐す、誰か相伴せん
唯有白雲天際帰	唯だ白雲の天際に帰る有り

吾詩

日觀礦石化成銅	日は觀る礦石化けて銅と成る	
冶去鎔来方亦工	冶 ^と かし去り、鎔 ^と かし来 ^{まさ} って方 ^{たぐみ} に亦た工なり	
却咲吾詩同瓦礫	却 ^{わら} って咲う、吾が詩は瓦礫に同じと	
未容鑄鍊入炉中	未だ容れず、鑄鍊炉中に入り	
句成常愧欠敲推	句成りて、常に愧 ^は ず、敲推を欠くを	
欲覓雌黃又向誰	雌黃を覓めんと欲して、又た誰に向かわん	
唯有銅山瘴烟上	唯だ銅山が瘴烟の上に有りて	瘴：風土病
衝天臭氣似吾詩	衝天臭氣は吾詩に似たり	

六月九日溪遊同明星世洲

瞰影未昇災未揚	瞰影未だ昇らず、災未だ揚がらず
早行払露草鞋涼	早くに行く、露を払いて草鞋涼し
喜捋十丈紅塵眼	喜びて十丈紅塵の眼を捋 ^{こす} り
移見峰巒影鬱蒼	移し見る峰巒影、鬱蒼 ^{うつそう} たり
争擲輕簪傍石磯	争いて輕簪を擲つ、石磯の傍
驚鱗潑々出波飛	驚いて鱗潑々として波に出て飛ぶ
獲来沙上各相詫	獲り来る沙上各相詫 ^{はづはづ} たり
苔氣充腸如許肥	苔氣腸に充ちて、許すが如く肥ゆる

孤邨雪景園

際晚孤邨雪始晴	晩に際し孤邨の雪始めて晴れ
---------	---------------

柴門茅舍白盈々	柴門茅舍、白く ^{えいえい} 盈々たり	盈：満つる
長空鷗點稀疎墨	長空に鷗點の疎墨稀れに	鷗點：からす
翻向林梢影更明	翻がえって林に向かう梢は影更に明なり	

辛酉元旦

辛酉：大正10年

屈指銅山度幾春	屈指の銅山、幾春度る	
等閑送旧又迎新	等閑旧を送り、又新を迎える	
些些未尽陶鎔力	些些、未だ ^き 尽きず、陶鎔の力	些：いささか　すこし
已作中年以後人	已に中年以後人と ^な 作る	
二百年来山自豊	二百年来、山自ずから豊かに	
深山曆日又春風	深山の曆日は又春風	
主家大業長如線	主家の大業は長き線の如く	
唯在銅烟縷々中	唯、銅烟縷々の中に在り	縷：いと

夏日田家

也是堯夫安樂窠	是也や、堯夫も安樂の ^す 窠	
一廬長夏睡中過	一廬の長夏、睡中に過ぐ	
猩紅滴落榴花露	猩紅滴落、榴の花の露	
鴨緑吹皺蘋葉波	鴨緑吹皺、 ^{ひんよう} 蘋葉の波	蘋：うきくさ
刈麦已懷豊歳喜	麦を刈りて、已に懷し豊歳の喜び	
插秧復唱太平歌	秧を ^さ 插して、復た太平歌を唱う	秧：なえ
十風五雨天恩渥	十風五雨、天の恩は ^{あく} 渥し	
豫ト今秋收穫多	予め占えば、今秋の收穫多し	

銅山途中

一路泉声無古今	一路泉声、古今に無し
往来廿歳洗吾心	往来廿歳、吾心を洗う
堪嗤世俗弄琴筑	嗤うに堪え、世俗琴筑を ^{もてあそ} 弄ぶ
不識天然山水音	識らず、天然山水の音

中元書感

光陰半歳電光弄	光陰半歳電光 ^{いじ} 弄り	
又到中元驚客魂	又た、中元に到りて客魂を驚かす	
幡影西風秋寺々	幡影西風秋の寺々	
鼓声明月夜村々	鼓声明月夜の村々	鼓：つつみ
空将白露濺吾淚	空しく、白露をもって吾涙に ^{そそ} 濺がんとす	

未向黄泉酬父恩 未だ黄泉^{こうせん}に向かい、父恩^{むく}に酬いず 黄泉：みよ 地下 あの世
千里夢飛墳墓地 千里の夢飛ぶ墳墓の地

年来久欠薦蘋蘩 年来久しく、蘋蘩^{ひんはん}の薦めるを欠く 蘋：うきくさ
蘩：しろよもぎ ふき

寒江垂釣

巖根繫艇一竿横 巖根繫艇一竿横たわり
激灩波光映雪清 激灩^{れんえん}波光雪に映じて清らかなり
龜手方驚天欲暮 龜手方に驚き、天暮れんと欲す 龜手：寒さで垢切れた手
風蓑独速凍成声 風蓑独り速に凍りて声を成す

秋日同諸子遊南光院途中

采紆陰棧架巖横 采紆陰棧巖に架りて横たう
石墮砂崩不易行 石墮砂崩行くこと易すからず
一笑山容扮嬌女 一笑山容嬌女に扮^{よそ}う
紅衣緑髮媚秋晴 紅衣緑髮秋晴に媚^{こび}ぶ

題巖頭孤松園

寄跡寒巖瘦石辺 跡を寄す寒巖瘦石の辺
龍蟠螭屈倒臨淵 龍蟠^{りゅうばん}螭屈^{くつ}倒れ淵に臨む 龍が蟠わだかまり 螭屈：しゃくとり虫
宛然我亦山中客 宛然^{えんぜん}我も亦、山中の客 宛然：あたかも
霜苦雪辛三十年 霜苦雪辛、三十年

※龍蟠螭屈倒臨淵：他日を期して退き隠れる

除夕即事

回首乾坤日月駢 首を回らせ乾坤^{けんこん}日月を駢 乾坤：天地。陰陽。男女。
光陰不駐似奔車 光陰駐まらず奔車に似る
謀生正占終身地 生を謀り正に占める終身の地
安分盆欣容膝居 分に安じ盆^{よろこ}を欣び膝を容れる居
漫玩文章共世笑 漫^{そぞ}ろに文章を玩して世笑を共にす
肯將富貴買名譽 肯^あて富貴^もを將^もって名譽^もを買わん
一閒贏得家資足 一閒^{あま}贏し得たり、家資^{たす}け足り
不學顏公乞米書 顏公の米書を乞うを學ばず 顏公：顏真卿

癸丑元旦

故歲帰何処 故歲何れの処にか帰らん 癸丑：大正2年
迎新宿雪間 雪間に新宿わ迎えて 故歲：年老いて
境清怡俗遠 境清く俗の遠くを^{よろこ}び

眠足覺身閒 眠り足りて身の閑かなるを覺ゆ 閒＝閑
烟火百年地 烟火二百年の地
銅甌二郡山 銅坑二郡の山 二郡：宇摩郡と新居郡
誰言無曆日 誰か言わん曆日無し
淑氣滿孌顏 淑氣^{とわ}孌^{とわ}の顏に滿つ 淑氣：新春の温和な氣

聞鶯 葱：青い
綿蛮葱聽葉間鶯 綿蛮葱聽葉間の鶯 綿蛮：小鳥がさえずる声の形容
暖日和風得意鳴 暖日和風、意を得て鳴く
学得村家紅女業 学び得たり村家紅女の業 紅女：はたおりの女 工女
金梭擲処柳絲輕 金梭擲^{ひなげう}つ処、柳絲輕し 金梭擲処：はたおり機

瓶中桃桜同插 插＝挿
嬌緋妍白共相親 嬌緋妍白共に相い親しみ 嬌：なまめかしい 妍：うつくしい
長短枝々插得新 長短の枝々を插し得て新たなり
一尺銅瓶天地濶 一尺の銅瓶天地濶ひ 濶＝潤
武陵春接日東春 武陵の春に^{つら}接なる日東の春

初夏掃兩妻墓
前墳連後塚 前墳は後塚に連なり
双在望夫岡 双つ望みて夫^かの岡に在り
草合旧時色 草は合う旧時の色に
花飛今日香 花は飛ぶ今日香る
苔痕鎖碑碣 苔痕碑碣を鎖^とざし 碑碣：石ぶみ
雨点湿衣装 雨点は衣装を湿らす
欲去重停杖 去らんと欲し、重ねて杖を停む
徘徊情緒長 徘徊の情緒は長し

移蕉
移来儘使竹枝扶 移り来たり 儘^{ことごと}く竹枝をして扶けしむ
大葉当窓櫨緑濡 大葉は窓に当たり、櫨^{どんりよく}緑 濡れる
聴雨惹愁他夜事 雨を聴き愁いを惹く、他夜の事
凉陰先助睡工夫 凉陰は先ず助く、睡の工夫を

夏夜待月
水辺待月有余淒 水辺に月を待てば、余淒有り

荷気蘋香満曲堤	荷気の蘋香は曲堤に満つ	蘋：うきくさ
忽見金波閃松上	忽 ^{たち} まち見る金波松上に ^{ひらめ} 閃き	
蛟龍影臥小池西	蛟龍の影臥す小池の西	蛟龍：みずちと龍

秋江呼渡

渡頭停杖立呼航	渡頭停杖立ちて航を呼ぶ	渡頭：渡し場。
早已遙林歛夕陽	早くも已 ^{すで} に遙林夕陽を ^{あつ} 歛める	
一片秋光倩誰画	一片の秋光、誰を ^{やとい} 倩として画く	
蘆花雪白月昏黄	蘆花雪白にして月 ^{こん} 昏黄なり	蘆花：アシの花

溪水洗硯戲作

手携端研向清湾	手に端研を携え清湾に向かう	
洗滌蘋香魚影間	洗滌蘋香魚影の間	蘋：うきぐさ
却恐龍蛇忽騰躍	却って恐れる龍蛇、忽ち騰躍す	騰：あがる
黒雲乱発水中山	黒雲乱発、水中の山	

萱堂六十一初度恭賦誌喜

彩服爛斑舞老菜	彩服爛斑、老菜に舞い	
龜孫鶴子侑飲来	龜孫鶴子、飲を ^{すす} 侑めて来る	
慈顔一咲十分醉	慈顔一笑、十分酔ひ	
保命春斟延寿杯	保命春斟、延寿の杯	斟：くむ

晩春訪山中禪友

欲尋禪友洗塵心	禪友を尋ね塵を洗わんと欲して	
先領高山流水音	先ず領す高山流水の音	
誰料去年紅葉寺	誰か料らん去年紅葉の寺	
春風今日落花深	春風今日落花深し	

小集同諸君時四月下旬也

偶然遇知己	偶然知己に遇ひ	
翰墨此開場	翰墨此に場を開く	翰墨：書いたもの。筆跡。文章。
画法兼南北	画法南北を兼ね	
詩談雜宋唐	詩談宋唐を ^{まじ} 雑える	
碁声消永日	碁声永日を消し	
簾影忽斜陽	簾影忽まち斜陽	
飽領閑中趣	飽領閑中の趣き	

浮生百可忘 浮生百^{すべ}て忘るべからず
黃梅節稍近 黃梅の節、稍^{ひやう}近く 稍：やや
連日雨疎々 連日の雨、疎々たり
竹暗宵吟処 竹暗宵吟の処
茶香午夢余 茶香午夢の余
只教樽有酒 只だ、樽酒有るを教えて
寧歛食無魚 なんぞ歛^とばん、食に魚無きを
歸興期明早 歸興明早の期
山程預弁興 山程預りて興^{そな}を弁える

初食筍

昨夜春林奮蟄雷 昨夜春林蟄雷奮い 蟄雷：初かみなり
一番清饌味佳哉 一番清饌^{ごちそう}の味佳なり
稚籠没入詩人腹 稚籠没入詩人の腹 稚籠：たけのこ
乍卷波瀾万頃来 乍ち波瀾万頃を巻いて来る

書感寄義兄伊庭君

歲月催人似水流 歲月人を催して水流に似し
卅年猶未返江州 三十年なお、未だ江州に返らず
又逢重九揮遙淚 又重九に逢うて遙淚^{ふる}を揮ひ 重九：九月九日
望断関山万里秋 望みを断って関山万里の秋

乗橋下銅山作

卅年碌々浴恩波 三十年碌碌恩波に落とし
今日斯榮覚分過 今日その榮、分過を覚ゆ
未此陶潛患脚疾 未だ陶潛^{とうへん}の脚疾を患わざる
笑同僕射抱身痾 笑って同じ僕射の身の痾^{やまい}なさを抱く
高低鳴杖凌山險 高低杖を鳴かせて山險を凌ぎ
左右卷簾臨岸阿 左右の簾を巻いて岸阿に臨む
無限秋光吟不尽 限り無き秋光吟尽きず
楓林是処夕陽多 楓林是の処、夕陽多し

柳陰待渡図

陰雲垂野近黄昏 陰雲野に垂れ黄昏近く
渡口呼舟立柳根 渡口舟を呼んで柳根立つ 渡口；渡し場。渡頭。 渡頭も渡し場。
売酒家遙隔川住 売酒家遙かに川を隔てて住み

青帘掛在杏花村 青帘^{れん}掛けて杏花村に在り 帘：酒屋の目印の旗

到弟村途中

細口^{うた}転到碧溪東 細い道^{うた}転、碧溪の東に到り □は足^{あし}：みち
小立斜陽淡々中 小立斜陽淡々の中
愛聴鵲声與鶯語 愛でて聴く鵲声と鶯語と 鵲^{けん}：ほととぎす
緑思紅怨不相同 緑思紅怨相同じからず
山村四月正晴和 山村の四月正に晴れて和す
為愛風煙得々過 風煙を愛でる為に得々として過ぐる
一綫不通牛馬徑 一綫通らず、牛馬の徑 綫：すじ
翠條青蔓掠頭多 翠條青蔓頭^{かす}を掠めて多し

十五夜泊作羅島

夜泊嶋陰山氣沈 夜嶋陰に泊まれどば山氣沈み
羈人愁與碧波深 羈人^{きじん}の愁は碧波とともに深し 羈人：旅人
遊魚水底看堪数 遊魚水底を看て数に堪え
正是寒蟾到海心 正に是れ寒蟾^{かんせん}海心に到る 蟾^{げん}：ひきがえる
海色天容相共情 海色天容相共に情あり
澄々萬里月分明 澄々萬里月分明なり
忽然破波見魚躍 忽然波を破って魚の躍るを見る
一片寒光飛有声 一片の寒光飛んで声有り

燧洋舟中

帆腹便々風怒號 帆腹便々風怒號す
長年擁揖氣争豪 長年^{ゆう}揖を擁して氣は豪を争う 揖：おじき、えしゃく、あいさつ。
却疑身臥滄波底 却って疑う身は滄波の底に臥し
頭上潮声一丈高 頭上の潮声一丈高し

夜登象山

黯々腹陰々 黯々^{あん}腹^また陰々
燈龕火欲沈 燈龕^{がん}火沈まんと欲す 龕：ずし
雲過疑羽客 雲過ぎ羽客を疑い 羽客；羽がはえた仙人
雨落起驚禽 雨落ち驚禽起きる
神徳満天地 神徳天地に満ち
岳靈無古今 岳靈古今無し
夜行毛髮凜 夜行毛髮凜として

鋏石證茲心

てつせき
鋏石この心を證す

室津夜泊逢雪

舵楼回首失東西	舵楼首を回し東西を失う	舵：舵に同じ
望断家山大海風	望み断つ家山大海の風	
長記今宵泊舟处	長へに記す今宵舟を泊める处	
満天飛雪灑寒篷	満天の飛雪寒篷灑ぎ	灑：そそぐ
孤舟泊在□湾中	孤舟泊って□湾の中に在り	□の字は山奥：澳に同じ：隈または深
鞳鞳濤声激暗風	鞳鞳濤声暗風激しく	鞳鞳：鐘鼓の音
篷窓一夜聞飛雪	篷窓一夜飛雪を聞く	篷窓：とまを掛けた舟の窓
太與山棲情不同	太と山棲と情同時からず	

有感書所見

慷慨平生志未灰	慷慨平生志未だ灰ならず	慷慨：なげきいきどおる
篷窓決眚眼双開	篷窓眚を決して眼双つ開く	眚：まなじり
嶋肩疊石疑軍壘	嶋肩石を疊ねて軍壘を疑い	軍壘：眚
州觜堆砂認礮台	州觜砂を堆くし、礮台を認める	
沿海頻年尽人力	沿海頻年人力尽き	頻年：毎年
列藩何日養民財	列藩何れの日にか民財を養う	
徒教我輩懷幽憤	徒らに我輩をして幽憤を懷かしめ	幽憤：心中にこらえている怒り
漚艦騰々往又来	漚艦騰々往きて又来たる	騰々：おどりあがり

京師客中歳晚

街路縦横十丈塵	街路縦横十丈の塵
満城車馬簇蹄輪	満城車馬蹄輪簇る
但言民庶争馳利	但言う民庶争って利に馳り
我亦銅山銅臭人	我亦銅山の銅臭の人
来寓京城遇歳余	来たりて京城に寓り歳余に遇う
時荒人事太紛如	時に荒ぶる人事太だ紛如たり
権官将廢開山業	権官将に廢す開山の業
泣読鉞夫乞米書	泣いて読む鉞夫乞米の書
五千人命聚孤身	五千の人命孤身に聚め
風雪何辞萬苦辛	風雪何ぞ辞せん萬の苦辛
除夕未成救荒議	除夕未だ成らず荒を救の議
枉懷宿志向新春	枉げて宿志を懷かしみ新春を向かう

丁卯九月廿六日下銅山輿中述懷
丁卯：昭和２年
山雲漠々轎簾寒 山雲漠々として轎簾寒し 轎簾：籠のれん
敢道坐行容膝安 敢道坐行膝を容れて安し
仰向秋天聊自訴 仰ぎて秋天に向かい聊か自ら訴える
霜楓応似我心丹 霜楓^{たしか}に我心丹に似たり

贈今澤叔藏

為重主恩輕往還 主恩を重いじて往還輕し
憐君遠役暫無閒 憐君遠役暫らく閒無く
雪泥鴻爪八州地 雪泥鴻爪八州の地
秋雨猿声四国山 秋雨猿声四国の山
素志共談文墨外 素志共に談ずる文墨の外
赤心自露酒杯間 赤心自ら露となる酒杯の間
紀行一卷皆金玉 紀行一卷皆な金玉なり
老練感歎開我顔 老練感歎開我が顔^{かんげせ} 開く

遊南光院

簫寺久在溪山村 簫^{しょう}寺久しく在す溪山の村
閑遊好此暫開樽 閑遊好し此暫く樽を開かん
石龕^{がん}拝仏掃松陰 石龕^{がん}仏を拝し松陰を掃う
蘇壁題詩留墨痕 蘇壁に詩を題し墨痕を留めん
芳露殘叢胡蝶夢 芳露殘叢^{そう}胡蝶の夢
綠雲新樹杜鵑魂 綠雲新樹杜鵑の魂 杜鵑：ほととぎす
山深境古清幽足 山深く境古にしい清幽に足る
無復林間鳥語喧 復た林間に鳥語^{かま}の喧びすしき無し

是為客中之一快事矣

寄跡京城未放還 京城に寄跡して、未だ還るを放たず
落花啼鳥伴愁顔 落花啼鳥愁顔を伴う
光陰流似鳧川水 光陰流れて鳧川の水に似たり
綠遍東南四月山 綠^{あまね}遍し東南四月の山

尼崎途中

水村漲後望無涯 水村^{みなぎ}漲る後望み涯無し
幾度迷途問酒家 幾度びか途に迷ひて酒家を問ふ
沙際秋田没經界 沙^{すなぎわ}際秋田經界に没^{さかい}し

棉花都似荻蘆花 棉花すべて荻蘆の花に似たり

拝楠公墓作時祠堂新成

土木隆興亟告功 土木隆興^{すみやか}亟に功を告げ
千秋天日照精忠 千秋天日精忠を照らす
誰知磅礴乾坤氣 誰か知らん磅礴乾坤の氣 磅礴乾坤：限りない天地のような
留在豐碑一片中 留めて豐碑一片の中に在り

生野雜詩

開關知何歳 開關知らん何ずれの歳ぞ
星霜旧宇寰 星霜旧宇寰 宇寰：全世界
貨財根本地 貨財根本の地
白赤混淆山 白赤混淆^{こんこう}の山 混淆：まじる
豐歉春秋外 豐歉は春秋の外 歉：あきたらない 春秋外：ものたりない
盛衰洞窟間 盛衰は洞窟の間
華奢寧可咎 華奢寧ろ咎めるべし 華奢：弱弱し様
執業実辛難 業を執りては業に辛難なるべし
人家水一方 人家水の一方
瘴霧日茫々 瘴霧日に茫々^{しょう}たり 瘴：一種の熱病 茫々：疲れたような
礦咏從東北 礦咏は東北に従^よりす 礦咏＝鉾脈
山光雜黒黄 山光は黒黄^き雜じる
茅茨連瓦屋 茅茨瓦屋連なり 茅茨連瓦屋：かや葺きの家
神廟接僧房 神廟は僧房に接す
纍々多墳墓 累々として墳墓多く
荒涼傷客腸 荒涼として客腸も傷^{いた}ましむ

到中瀬金山途中

雲巒疊々水湾々 雲巒疊々にして水湾々す
十里人行紅葉間 十里人行く紅葉の間
我是不貧能識別 我是れ貧らずし能く識別し
金銀氣在目前山 金銀の氣は目前の山に在り

觀潮阪

貧看風景轎簾開 風景を貧ぼり見て轎簾開き 轎簾：籠のれん
阪到觀潮首幾回 阪觀潮に到りて首幾たびか回る
但有大洋觀不改 但だ大洋觀を改めてざる有る

潮声依旧卷空来 潮声旧に依りて空を巻いて来る

不二山

西土崑崙豈得同 西土崑崙豈に同ぐくを得ん
八方如削玉玲瓏 八方削るが如く玉玲瓏たり
寰中真箇応無二 寰中真箇^{まさ}に二つと無し
独拄乾坤立大東 独り乾坤^{きき}を拄えて大東に立つ

贈薤山知縣事江川君

此地曾聞多壯夫 此地曾^かつて聞く壯夫多し 壯夫：血氣盛んな男
能文能武四称呼 能文をなし能く武をなして^{よも}四に称呼される
我来感歎民心厚 我り来りて感歎す民心の厚きを
耕讓田疇行讓途 耕しては田疇^{ちゅう}を譲り行けば途を譲る 田疇：田畑

豆州途中

万里南洋指顧間 万里南洋指顧の間 指顧：指さしてふりむく
水禽陰没夕陽閑 水禽の陰没して夕陽閑なり
碧茫々外時留眼 碧茫々外時に眼に留まり 茫々：広くて遠い様。ぼんやりとして
一點青螺八丈山 一點の青螺八丈の山 青螺：青い山の形容

遠州洋子舟中

長風万里一帆奔 長風万里一帆^{はし}奔り
波浪茫然天欲吞 波浪茫然として天吞まんと欲す 茫然：ぼんやりとして
忽有長鯨立噴氣 忽ち長鯨立ちて気を噴する有り
飛濤如雨昼昏昏 飛濤雨の如く昼昏^{こんこん}々たり 昏昏：暗い様

晩夏早起

小園風露爽於秋 小園風露秋より爽やかなり
片月猶懸隣樹頭 片月猶懸る隣樹^{ほとり}の頭り
何物驅人催早起 何物か人を驅って早起を催^{うなが}し
一籬花綻碧牽牛 一籬花綻びる碧の牽牛 籬：まがき、芝や竹を荒く編んだ垣根
牽牛：あさがお

墨水泛舟

旗亭何処繫吟篷 旗亭何れの処か吟篷を繫ぐ 泛：うかべる
魚氣細吹蘋末風 魚氣細く吹いて蘋^{ひん}末の風 篷：とま 舟をおおうもの
三尺女牆斜匝岸 三尺の女牆斜^{しやう}めに岸^{しやう}をめぐる 蘋：うきくさ
牆：かき 匝：めぐる

垂楊顚蔽夕陽紅 垂楊顚蔽い夕陽紅なり 顚：しろい 蔽：おおう

不忍池夜帰

酒散回塘孤月斜 酒散じて回塘孤月斜なり 回塘：土手を回る
涼衫獵々客帰家 涼衫獵々客家に帰る 涼衫獵々：浴衣がかぜにひるがえる
輕煙罩水全池暗 輕煙水に罩めて全池暗らし
満面荷風不見花 満面の荷風花を見ず 荷風：ハスの風

おわりに

広瀬幸平の漢詩を読んでいると日記のように綴ったのではないかという気がした。真名の漢字で日記を綴った最後の人達が明治の人達であった。漢字が分からなかった場合には仮名で書きとめる世代にとっては、漢詩は歯が立たない。よくよく考えてみると漢字は日本語とは構造がまったく異なる中国語を表記する外国の文字であった。漢字は音と意味とを兼ね備えていたので、その機能を使って日本語を表記してきたので、ついつい日本語と思い込んでしまっていた。真名と仮名、洋式と和式、雅びと鄙び、ケガレとキヨメ、公家と武家、ホテルと旅館…などなど、二重で表裏関係の日本の構造が垣間見られる。

しかし、不得手のことには手を出さぬことを痛く感じた2年間であった。なんとか時間を費やして最終ページの32ページにたどり着くことが出来た。漢和辞典を引いて漢字を再度覚えた長い紙上の旅であった。

「発郷」の下4行は以前に知人から意味を聞かれた。それが「鍊石餘響」に納められているのを初めて知る。幸平が9歳にして故郷を旅立った時の心境を綴るのを読むと目頭が熱くなった。18歳で進学して上洛した時に重なる。しかし、悪縁を結ぶとは思わず、遊学の機会に胸躍らせていた。琵琶湖の湖畔を自転車で回り、淀川に沿って宇治まで歩き、電車にて大阪まで行き交ったことがあっただけに、中主村の空は泣けてくる。今、旧中主村を訪ねても元家の境石が残っているだけである。かつての家の前の道路脇に、地元の有志によって石柱が設置されている。

天涯結悪縁 天涯に悪縁を結ぶ
棄去故郷天 棄て去る故郷の天
湖水亦西下 湖水また西に下り
送吾過淀川 我を送るりて淀川を過ぎる
何の因果か、この浮世において悪縁を結ぶ
だから、故郷である中主村を捨てて去って行く
琵琶湖の水は、私と同じように西に流れ下り
淀川の水となって大阪まで送ってくれる
(瀬戸内海の水となって新居浜まで付いて来てくれよ)